里見八犬傳

第四編

巻之四

へ13
709
19

門 遠 18
號 709
卷 19

明治十六年十月九日購求

南總里見八犬傳第四輯卷之四

東都　曲亭主人編次

第二十七回

病客藥を辭して齡を延ぶ
俠者身を殺して仁を濟す

房八伝のく莞爾とうち笑ひ物識る人ハ常かいふ積善の家餘慶あり金言宜しかる故あるかな大塚生ハ父祖二世忠信孝義儔稀なるその緯の効ハ船中にてみづからいつをうけ窃聞しく詳に知りぬ妻の不慮に命を隕しる鮮血まそ自然と彼人の藥とするも天の冥福なり過失もかくこそ恥面を起に似たれ夫婦の恩愛今更かいなぬ心のうるはしハ千萬言もなほ足らず不覺に時を移さえよりとく鮮血を取ぬ一刀にく死ぬとも全體ハ中ぐ冷べくぐ温熱失ぐいつかく絞るとも血を獲んやとく。とのそぶせハ小丈吾この説に後ふく。

角くに立あがれども四下に さゝる器物。何をぞるとて久且べ念玉坊が送れる。
彼梭尾貝、横ゝに行燈のほとりに有あり。あるを究竟の物ゆゑとて取まぢ
佐く左手に取て。什る女帝を引起せば苦と叫び〳〵声と共に鮮血は堰と潰る。
瘡口に貝を推著く。南無阿弥陀佛。と唱る間に韓紅貝の
半分は受とりける。小文吾はいとでしく弱る心を励まして沼藺こゝと平活
べ糸より細く目をひそめて家兄に伏はまゞ存命て欲よに憑ゝ誠心を
説明さまゝ幾條か要るとぞかりうち作ることに扨はいかに声を沼藺は
起さんにも動まぢ。おろに泣ひつ。疑ひ霄と共侶に滅くやく身を惜
くて惜む名残は今一下さびいつぐ言葉をかへ嶋のよるべの岸に渡りて頼に
こゝ心地に伏るゝとの声はで冬に枯の朝の原の虫の音よりも衰果て今般
の呼吸に小文吾は胸塞りく武心も庭多泉流て涙を絞り落ゝ原来お沼藺は

現まく事大さに伏まとり〳〵秋然べ冥土の迷ひは霄ん山林は彼処にぞと良人の
くに推向まべ房はうち見まく目をとぢまゝ死お沼藺よりひけも好く狂ひ〳〵
刃はおん刃の薄命に子の横死は過世の業報勧解く今さらかまふよ〳〵拒〳〵
おろはあまに夫婦の鮮血は世にあるく死鳥傑のその死を起を某剤とるべ。
見ふまゝおる功徳はあるべ。ふるそ迷ひもまに正念とやまふ乱〳〵と奬されく
うち点頭。そはおろ見るく伏るゝ。おろひ拒ても堪くに死まに只大八がるものゝそ亡
骸あまとも今一下さび見るはまぞ。とうち歎げば房は頭をうち掉くそまも益
す。歎とまさん皆見諄言にまるべ。女〳〵かりける面ちまよくこの布を鮮
袖くに血も取らまぞ犬田殿とのふふのまとはは白の松にまるに結びけ〳〵。
布を解んとする程に喃今霎時吾倅に告別をと外面よりまに密音立て禁
るは是白山の妙真に開く入りく又闔る戸を走まども運び〳〵の舞足乃

踏所。こゝにふもあくぐ房八と沼蘭ぐほとゝふ身を投げく。哽かの泣沈こゝ。
且くゝく目を拭ひ喃房八豫さの歎死のゝまゝく。かゝらぬ旅の伴侶ふ想さ
孫さ人放遣るこゝ為ひとゝをいゝふく。羽さゝ八又誰を友誰をよゝぶふ慰ん子を
先ざて幸ゝ死ゝ。あゝとなる世の例ゆゝ。ゝふゝん悲ゝさよ寝くゝまぬ
宿ふ獨不楽く。苦ゝ死さの夜を暁さえゝう。切くゝん為の男ゝ死最期を看一
看べやゝく。竊ふ宿を起出く又さの檐下ふ出ゝけまゝど。とてもかくても存命ぬ
こゝ子と知ゝく迹追ゝく。哭ふ出ゝると叱らまん最期の疑。こゝ彼のいまゝ
るハ竊出ゝ。逢ざあくゝと返ゝん。と泣くゝども足の進まねば。開ぬ戸口ふ為を
倚かけく。音ゆゝそさそ孫夏虫のひとり焦まく又濡ゝと檐の玉水これゝふ。
雨さ涙の外ゝあゝ死かゝゝゝべゝと知るゝば。お沼蘭を送ゝかゝゝハせで。大八を
さ人隷てハ来さゝ。鳴の羽搔を百羽搔。搔死かゝ口説ども尽盡ぬこゝ這悔とゝ

ゝさふ。ゝひくゝぐゝ犬田ぬ。こゝ釜さの憾ハゝのゝゝん後の歎死を今宵そと知ゝゝる
よゝもゝ死と欷喃お沼蘭吾倩ハ豫く事情を知ゝゝく。ゝん為ふ告ざゝゝ紙公
つゝゝと恨さん。惜ゝや利鎌ふ嫋草の霜ふ先ざゝ幸ゝあゝさふゆゝも大八ぐ
最期ハ特ふ送憾ゝゝよ孺児よ。祖母ゝゝぞ。ゝいゝぐゝ。と亡骸を抱死ゝゝく
揺動ゝく又哽ゝる千行の涙ハ岩走ゝる瀧のゝとせめく。砕る四月の苦ゝさ紙ゝ
かゝもゝ死歎せゝ。沼蘭ハ有繋よ姑嫜の声ハ使けど哀傷と深痍ふ息を
吻ゆゝ。房八も共侶ふ弱る心を励ゝく母ゝよ。さのゝゝち歎死く。病ゝぐゝひ
ゝゝよ父の送訓を果さんとく。身を殺せば母ふ孝ゝゝゝ。子ふ又不慈の行忠
あゝ。一个ハ是ゝく。両个ハ非ゝ孝道寔ふ難ゝる便りまくゝ死母のゝ。頼むゝ
阿男大田殿。ゝ是懇ふ顕身の息ゝる程ゝそ苦悩ゝけまゝく。この布を解てよゝと
ゝぐさまく小文吾ハ慰めゝゝ。嘆息ゝ。ゝ是謬ゝく妹夫を殺ば又謬て妹を

良人ハ斃るまでなり。父とのゝも誰を恨んや大家ゝ勢ハ理りなれども今更千萬口説も要なきゝ。後世のいとなゝ肝要なるゝと諫く躯て房八がほとり近く身をよせく。布引解べ潰る。鮮血を受る法螺の貝吹くぐ玄常の尺とゝき。死天の山伏ゝ登ゝ岩廻む鷲の峯入ハ夫婦ゝを掖き子を負て往方ハ十萬億佛土蓮の臺法の雲踏ゝ迷ひそと薦めたる母ゝ老ぶく唱名乃声も涙ハ口隱ゝ。程ハ犬塚信乃ハ曩ハ小文吾と房八がうち合ゝ大刀音の子舎へ伝ゝ事ゝそあるとゝ安ゝぬ胸を鎮め苦痛を忍びて身を起さんとゝ。腰の立ねば枕辺ゝ。刀を含く杖ハ一ハ身を坐行ゝ息を吻死幾間もあらぬ家の内を虫の跂ハ如くゝ。出居と前房の間ゝ。障子のほとりハ来ゝ。房八ハゝ痰を負て。その赤心を諦ゝ。彼條の物ゝ。その妻その子の横死のゝ。伝ゝ病苦も外ハゝ且驚き

且悼ゝ感涙を禁あ。人をゝ。ハ物もよろく僅ハ障子一隔ハゝ。その初よりゝ。苦痛頻ハ堪ゝ其れ俯くゝ。ハ信乃ハ為ハ房八夫婦の鮮血を貝ハ盛るハ及びく。信乃ゝ悄然ゝて坐ゝ。頭を擡ゝ。生を好ゝ死を憎ハ則天の心ゝ。君子ハ庖厨を遠ざくるとゝ。ハ今ゝ命終ゝ。いでゝ芙士節婦の血をゝく茶剤ハ。ハ人ゝの心操を貴ぶべく。謝ゝく且受べゝ。彼房八ハ孝ゝ義ゝ類を古今ハヨヌく得ゝ。ハ羽立ハ保ゝけん息の内ハ對面ゝく志を告ゝく辛く坐行ゝく進ゝ近ゝ障子の腰ハ掛ても胸ゝ。ゝ果ゝ身の衰微をいと朽ゝく。ハ房八ハゝく奥へと頭ハく頻ハ進ハ。ハ小文吾猜ゝ。ハ事ハ紛ゝく。ハ彼人の病を訪ゝ暇ゝ。ハ今ゝ心ハ。

調ひ。良藥を空せんや。さんとくちづゝふ身を起し。溢るゝまぐゝふ血を盛る。
桜尾目を右ゝふ持く子舎へそ遽く。障子を莎羅と引開く進むえん
と程ふ。ろ程ふ信乃ゝ足踏みつ。跌躓く持ゝ見を忽地磯とうち落せば。
信乃ハ肩よゝ脛腓まぐ。透間もゝ血を沃まゝ。衣羅ゝまぐ肌膚ふ徹く。
彼瘡口ふ流入りえ。苦と叫びく仰反ゝ。小文吾いよく驚遽てこんまぐ
是信乃ゝりけり。そもいつの程より狗犬塚ハゝふ来りけん不思議ゝ獲
ゝ良薬をうち落せ。そいと惜ゝとてやよえん。かくせんと後悔こゝ
たのよりもゝく項と腋へ流かけく。起せどもゝや氣息ゝ。声あり立て呼泣べ
倘念王が覚のやせんと。ゝくべ奥ふ憚あり。いふもゝとゝと氣を尚くゝ尼さま
ゝふ勅ゝふそ妙真もこの為体を外ゝ見ハさんぐふく行燈の灯口推向て
いふくと尚ハ程ふ信乃ハ瞳の覚ゝが如く。身を戦く目を開く吻と息く

起ゝ。面色忽地田陽く。枯ゝ枝ふ花さく如く。腫色つく金瘡ハ瞬間ふ
結痂く。邪熱祛く身ハ軽く。元氣平日よりやまく。心地清々ゝくゝふ。
小文吾ハとの光景ゝ再び呆れつ欣びつ。ゝふ愆てうち被。薬効の効ゝけ
とゝぐめく曉ゝく面を起し。扨ゝと告ゝふゝん。妙真も亦ゝゝ子夫婦のゝゝ
いと本意ゝゝそ稱ゝ。當下信乃ハ形を儼く。小文吾ふうち對ひ曩ふ大
刀音のゆゝえゝよゝ。いとゝひとゝふ。苦痛を忍び身を坐行く。さつまぐ
まゝ障子を開くとゝ。俯々綽の趺をうち守く。かゝふ感ゝゝ。
さゝれ彼夫婦の血をゝく。ゝぶ破傷風ふ沃んハ忍びゝく呼行ゝ推辭ゝ
とゝの狂ふ跌まゝひの失ゆくうち被らゝ。鮮血の効欣病病立地ふ本復く。
今更辞ゝとゝふ由ゝく。その恩を謝く。義を感く。且妙真を慰ゝく共伍ふ
房ハゝほゝとふいゝ紀く對面く。姓名を告ゝく。その義勇を誉恩徳を欣びくこの

死を憐み今生のみ交る日の久しからぬ歎なり。又いつの世か某をさらむも。和殿夫婦の恵みよりまさる難治の金瘡愈さんとも。和殿夫婦を生さんと思ふ良薬

見たりそ恨みまゐらん幸のみ難を脱れ志を得るとあらば。こゝろざしの衣を染る鮮血を後までも秘蔵して。その恩徳を子孫に伝へん親の遺訓を守りて。

妙見菩薩を解けばとく死でも事の済べきに可惜義勇の壮夫のその身のくるしみ。妻をも子をも殺さん天道暗きに似たり。嗚呼古人をも命とのたまふ欲且毋

御毒のいと賢き内室のいと貞き。その子も成長るまゝに忠孝義勇親に肖さ。

世の馬傑まゝ死に後まゝ遺いと惜まれ加旃大田親子も亦是忠信孝

義の人なり。斯良吾の人々の縁を結び。義に仗まゝ。彼枉津日の神支欲家の

艱難勢に憂事繫ぐ船のし。死生救ふ一つ思ひ名を死と成べ今又難

治の病著不思議に愈も救ひまゝ経を誦し菩提を弔ふ追薦回向も

法師の呼為に何ぞ恩義に酬ふべしと感嘆の涙を沃ぐ露の玉

清き心ぞあらはるる小文吾も妙真も人の誠の憑しく。のと理りと思ふのに慰め

ゝ秘嘆の外に辞いまゝけり。そゞ中に房八は絶えんとする氣を引起しく。

歓び信とこゝ。君子まる犬塚ぬし。信あり義ある。賞美の言の巣善

知識の引導も千萬僧の説法もまゝ不思議とあべし。和君の難癒本復

まゝ進退更に自在まゝ。頭かく彼帆大夫に欺まゝ。

水陸の守兵を退け後まゝ和君を落しあゝの翁の縲絏を解せん。錯

こゝ大田殿。頭をとのそゞ小文吾頻に嗟嘆しく。早く山林

数刻深痍に届せしく今までもおいつと勇悍和殿の如くまゝ推しく

かくあるべきさるは痍に灸所に係まゝ。緩名醫の門に入ても存命べくもあらざ

れば。亦その意に従はざるやいと今さら影護まゝ已に成るを今宵宿

信乃
ち形屋
犬八
ぬい

妙薬の効験
信乃の食
陽を
妙真
房八
小丈五

せ。彼修験者念玉のゝ渠ハ別室ゐをり。甲夜過る比まぐら尺八を吹遊ゝ。その後ハ音もせぬど渠熟睡しく一毫も縛の中を知ぬハ許さん。今の世の人心笑乃中ゐ刀を隠せ。只彼ゞ玉のゝゐくゐひく四目ハ臂ゐあらざ。その寤ゝや。寐ゝや。足々ゝ暇あゝぎり。玉まぐその臥房を窺ゝくり。訝しゝるゆあゝぐく禍の根を断ん事ハ浅易しく成ゝて。ゝゑく後を防ぐ。心盡しも仇ゝるゆゝん。と耳元告く身を起せ。信乃ハ仰のくうち点頭いゝく趣今きゝゐ。ゐひ合ゝるとゝそゐ玉某子舎ゐ在しとゝ。別室のゝ狭とおぼしく密潭ゐ声ゝゝり。只そのゆゝるゝゝ。腐ゐ某彼知ゝる。障子のあゝゐ在しとゝ。ゝゝく簀子の閑む音せゝ。足々ゝん。と欲せしゐ病苦甚しゝ。折ゝゝ進退しゝ後ゆあゝゐ任せど且暗々ゝゝ人狡猾狡或ハ胆の呼為ゝゝ。狡定々ゐハ仰ゝゝ。偽その修験者ゝゝゝ。とゐゐ小文吾ゝち驚ゝく。その念玉ゐ疑ひゝ。且密

談の声せしゝ。謀しあゝせしゐあゝく竊ゐ背門ゝ。ゝ来つゝゝん。との條乃ゝゝ。ゝゝや洩ゝく。密訴せゝゝゝ。脱れぐし。由断大敵ゝゝゝゝ。鈍や大事を悔ぬと慚愧後悔措ゝもく。腋刀の鞘釘走せでと右潤しゝゝ。怨懟の面色進むを妙真推禁めゝ。その人同類あゝゝゐ敵のヨヌ少ハ揣ゝゝ。漫ゐゝゝゐゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ房ハ氣を閼あげ。今般の苦痛只ゝくゝとのゝぐゝゐゐ。信乃も俱ゐと遽しく刀を含ゝく身を起。小文吾ゐ引ゝゐゝく。齊一別ハ室へ赴んとゝる程ゐ出居ゝ立前房の間ゝ障子のあゝゐゝ人ゝゝく。ゝゝゝゝみゝゝく声をゝゝ立ゝゝゝ人ゝ且く等ゝ房國守里見治部大輔義實朝臣創業の功臣ゝゝゝ。金碗八郎孝吉が獨子。金碗大輔孝德法師、大坊。同笹潘の士故伏姫君の傅ゝゝ。蜑崎十郎照武ゝ家男蜑崎十一郎照文ゐゐゐゐゐ。今對面しく疑念を釋ん且く等。と呼ゝみゝく障子を颯と推ひゝゝ。並拉ゝく近づくゝ。ゝ見ゝゝ別人ゝゝ。大先達念玉ハ茂ゝ

旅に窶したる墨染の麻の法衣を腰短に褄端折して白拵の脚絆を穿。頭陀袋を
背にかけて左手に網代の笠を拿り右手に錫杖を突立つゝ徐々と歩み登て上坐にぞ
著たりける。これ則是、大かた又修験道観得ハ髻髪を髻結して段々笹の
麻衣に精好の野袴の段子の下縁取たる腰卯に著なして。朱鞘の両刀を跨て
白木の小四方に書札四五通乗たるを恭く捧持て、大かた次の席に著ぬ。まづ
蟇崎照文なるが。ひらけるのみならず誰ならんと怪ざるべき。その吉凶を料
らず。かの心得たる當下、大きに席上をつらくとうち見巡らし、人々にむかひて云
まそ初より實をもつて汝達に告ざりしハ思ふよしあればなり。是れ八年来故ありて仁義
礼智忠信孝悌の八個の文字おのづから見えたる八顆の玉を索ん為に六十餘國を
行脚すれども一個の玉だも見ることかなはず。かくて今茲五月の初より。杖を鎌倉に曳く
程に。昔歳竹馬の友なりし蟇崎十一郎照文が君命を戴て稟なり。賢良武勇の
浪人を召のびくに募るとて関東なる國々を潜行くに環會ぬ折からとの行徳に云
の力士あり。そが一人ハ髻に黒子ある痣ありて牡丹の花に似たりとの風聞仄に聞え
けり。その痣牡丹に似たると思ひあはせるよしあれバそが膂力をも試るべく又その痣を
見ばやとひそかに竊に十一郎と示合して是ハ鎌倉の修験者念玉と假名を告り。
彼も亦鎌倉の修験者観得と假名を告て途すがら従者を傭ふが如く衣裳をも行
李も似つかはしく山伏に拵立て。共侶にとの浦に来つ。先達職得分の争訟に假託て。
いぬる日八幡の社頭にて犬田と山林が相撲の勝負を試しに技も力も劣らぬ優
さりし但房八ハ小文吾に藝術聊亞ぐるのみ。ならず折果して犬田が痣を眼前に見る
ことを得つ。いよく捨るゝれおもひあはせたれども膂力ゐて智恵なきものハ是則牛馬に
等し。勇ありて残忍なるハ是則虎狼に等し。縦犬田山林ホ人に捷ぐれし力藝あり
ともその心術正しからずハ薦るに足るものならず。よく行状を見究て後にせんと深

念ふ遊山翫水ふ假托く十一郎共侶ふ逗留く今宵ふ及ぶ。かくてきのふ甲夜ろ間ふ及濱里ろ分ろ来く呼門ども応ぜるあり。よりく背門ろ入ろんとく。漫ま立遶ろ生垣の間ろ不圖ろも伺けばあり。親子ハ子舎ふ犬塚犬飼等と圍坐ろ彼玉のろ疵のろ又彼額藏の荘助ぐろ各ふ噂せ。伺とハ各ふ窺伺ろ又闕窺ろ未来の宿望成就の時到ろ。ろぶ欺び餓鬼ろく地藏の宝珠を見ろふ勝ろ。さが見その霄ハなくふ宿ろぢ。背門の庭ろ取くかへろ十一郎ぐ旅宿ろいめ行く窺ふ云云のよを告諜あり。く今宵又ろく宿りを鶏ぐ鳴く東ふ廣兎國ふも類稀ろ房ハぐ孝順義死の事の逸。大田親子ぐ良吾信義及犬塚ぐ賢みく薄命ろ又犬飼ハ友の為ふ志婆浦ふ赴行。くそぢくろの憂苦艱難窮ふ見ろ伺ろく。且感ぢ且悼ろぶ袖さふ濡ろ。ろのぢ浮世ろ笠ぢり。其外ふ在ろ月も有繋ろて生くろぶろ人のろ人説諭ぢ死時宜のろ。

その中ろ幾見果ろくかくまぢふ時を移ろ今いかろと思ひぐ行李を披て姿を更め旅ろ旅ふ寓ろて。ろ見ろ行脚の老僧ろを人とふ正ぢく且房ハふ。その妻その子の臨終正念幽魂解脱の導師ともろぢやとく。二十年ろ埋木の花ろ月の苔衣舊の姿ふ戻ろ。これも昔ハ憂ふ憂ぐ捨果く世よ。ろ深の袖ろく掩ふふ餘ろる四個の義士ふぐ不幸薄命或ハ一慈父一賢母或ハ貞婦と小児の枉死ふ。ろべむく蕩命を歎ろ。ろぶ刃ハ數ろ。ぢ南無阿弥陀佛と唱ろ。その既略をぞ説示を當下蛮崎照文ハ扇を膝ふ推立。渚賢者伝ぐ伝ろ不口や。ろぶ主君里見殿ハ文を右ふ。武を左ふ。當時無双の良將ろ。この故ふ仁義ふ厚ろぢ。ぢ動ぢ多ハぢ礼智ふ厚ろぢ。ぢ忠信ふ厚ろぢ。ぢ用ひ多ハぢ孝悌ふ厚ろぢ。ぢ賞し多ハぢ。ぢ賢を招くふ普ろぢ。ぢよろく某主君の密詔を奉ひ封彊を出く英士を募め

且二十有二年絶て信を通せざりし。孝徳入道ゝ大坊が存亡を訪ん為に今茲東八个國を編歴てさすらへども鎌倉にて法師と再会の事の趣、目今ゝ大のいはれし如し。されバゝ大と某と姿を変て此の地に来つ陽にハ不快にのみそ称して、陰にハ水魚の如く影の形に従ふ如し。さるゆゑ某ハ甲夜に背門より潛よりて倶に別室にをり、ゝ大が笛を吹くと聞えハ立出ておのおのの為体を窺ひつ。これ退けハゝ大法師が立かへりて窺ひし縡おちもなく聞見して感涙ほとほと袖を濡せり。犬塚犬飼犬田ハ既にこれ主家に宿縁あり。山林ハそのある事とも亦得がたき豪傑なり。これともかくも相謀なく犬塚が今窮に逼る窮阨を救ふべきに早して命に代らんとせられしハ殄滅し。これ主君里見殿ハおん父季基朝臣共侶に結城籠城の折、忠戦の義によりて成氏朝臣の御方なれども近死比ハ謁我の執權横堀史在村が奸佞非法の聞えあれバかの家ハ踈遠にして交ちかめの如くなるず。

されバ犬塚難義に及べ。これ亦一臂の力を勠て追手の兵を殺ちらし、相伴ふて本國へ還らんと思ふなる。人々心安かるべしと叮嚀に慰めて、来意を詳に告るにぞ。惘然としてうち驚き且惑ふて今覚果ぬ夢に夢見る心地せり。そが中に信乃小文吾ハ共侶に膝を進めて、ゝ大照文にうち對ひ、かの両君の本名来由を示されて疑ひ忽地氷解せしかども、道徳ハ又何等の故。仁義礼智云云の八个の文字見えし。八个の玉を索めらる又何等の故あるやらく身の痣牡丹に似たるあるを竊に愛顧せられしやらん。ちかごろ辞齊一聚すれバ、ゝ大ハちよくうち点頭きつ、おのおのハ理りさるべし縁故を告ん。その所以ハ如此くと彼八房の犬のことより伏姫ゝ始終のことより役行者の示現感応并に白玉の数珠のことより出家行脚して二十二个年歴たる事より、凡事の顛末を安西景連が滅亡の條より伏姫自殺の條まで辞短く解示しつ。さそのかそ伏姫ハ賢にして心操いと雄々しく孝にして慈悲ふかく才

類無双の未通女なりしまの故ゐ八房の犬ゐ伴まとく。富山の奥ゐ入へ籠りゐ。
絶えもん身を汚さじとのみぞ法華経讀誦の功徳ゐよりて。彼犬さへゐ成佛せり。
されども因果脱れがたけれゆゑ。やがてその氣成感じて。懐胎六ケ月ゐ及び
ぬれば義を自殺ゐ折。その瘡口より一道の白氣忽然と立沖て。彼感得の
数珠ゐ共ゐ中天ゐ見光紫乱れ。仁義八行の文字見えて。その八ケの巨玉八方へ
飛行し失て残れる地ゐ墮ちて。是を謬て鳥銃にて件の犬を撃殺し。剛姫ゐ傷
けれども君公の仁慈なる當坐ゐ自殺を禁ぜられ。親某ぶ髻を前刃捨ては出
家を許しゐ。ぶりで失ぬ八ケの王の往方を索て又舊の数珠ゐ繋ぎ八方へ
と誓ひて故郷を立去りゐ。されども汝達現八ゐ又彼犬川荘助も感德の王あるを
見まじ。その王ゐ見えて。文字八ぶ八の数珠と符合を且彼八房てゐ犬なる。その毛
白と黒ゐ殘雜へて黒ゐ牡丹の花ゐ似て。その数八ケの斑毛なりければ。八ケの

花房とのゐ義をなして八房と名つけ。なるゐ汝達荘助ゐまで四個ゐ倶ゐ
身中なる。その痣牡丹ゐ似ゐるゐあるぞ。かれば見汝達ゐおのく父あり母あれども。
その前身ゐ伏姫の胎内より顕れ走りて白氣の生るゐ欲その因を推して
果をなり八皆伏姫のゐ子ゐ。義實朝臣の外孫なるべし。且おのくその氏ゐ或ゐ
犬塚或ゐ犬川或ゐ犬飼或ゐ犬田と皆犬を以て稱するゐと是不可思議の因縁
なり。かれば汝達四人の外ゐ又四個の犬士あり。その相似る玉と痣を具足せる
らんゐ疑ひなし。今その人を尋ぬるとゐ竟ゐ全く聚ざるんや。されば宿願稍
時到りて。おのくゐ半を果しなり。疑しゐまづ是をよく見よ。と説諭しく伏姫の
像見なり。数珠を取出て示ゐ信乃小文吾ゐ豁然と玉の来由を感悟し。
遽しく彼数珠を受てつらくとゐ是を見るゐ現自他四人が所藏の玉と一毫も
異なることなし。只顕れなる文字なるのみ。数珠ゐ百顆ゐ数なるゐ八ケの巨玉なり

けり。原来吾们が所持たる八つの数珠の巨王たる丸といふべきものなるこの数珠を、
ゆゑ過世怪しむ西犬士と倶ふ妙真も感嘆く件の数珠を、ふたゝび持たる幸ひ
縛断ぎ、夫婦が耳ふも入りこれ房八は苦しみ吻と息しく眼を睜りよふ
美玉死人こゝろ、ぶ子の横死は惜むふ足もとぶその隊ふ入るよ、る見たるこん
後まぐのと欲ふ。噫憾べし憾べしと只管嗟嘆たるけり。大八はまを憐みく。
そのほとゝふ立よりつゝを、房八さの多く憾そ汝犬士ふわゝもとのふたその義
烈は犬士と共ふ後の口碑ふ伝ぶ、ぶ子こんや。則汝が祖父安房の杣木の朴平が
武藝の師たり主たり。金碗八郎が獨子こは八郎大人の自殺のるふ定包を討滅せ。
功成名遂く。栄利を願はも。死しくいよく亡ぶる是忠臣のまこと。彼
朴平が失も。尤ふ父の憾る所。誰うまるをよしとせん唯この順孫房八ありく。祖父の
悪名を雪ふ足る。よゝまく、是今汝が為ふ。朴平が疎忽の罪を亡父ふまく、宥る

めたり。まを残冥府の裏ふ、く。清果を沼よと諭しこゝ辞をちこゝふ房八は佶と
向上く左手を抗く。頻ふ、大をうち拝む歓びさそと。妙真は又哽かりて哭ふ
けり。且く、大法師は妙真がほとりふ卧させ。大八が亡骸をこんかうふ、く噴
息しこの小児憐むべし。死しく時を歴こまでも。その血色変くまでしく、さるぶ生る
如くん故なりまを。亦奇へとひとりまどちつく小膝を突く。安をと死骸を抱ぶ。
そぶまく嚙ふうち乗しく脈を診んとく左の手の寸口を楚と含まぶ大八忽地
甦生しく曰と哭と頻たり。賸まをくより握語こゝ左の拳式初く撥ぶこうけるふ。
堂の中ふ王あまく。信乃小丈吾ふぶ王と異るくまを。少八仁の字見まこゝ。加旃
大八が腕肚ふ痣いで来。単衣の腕散まを。黒かるふんえこゝるが形牡丹の花ふ似
こゝと父房八は蹴らまし、こと。九ちの痣八いで来しを入こゝか今まぐまこゝざるけり。
九この席ふあまとこのるめ。かゝる奇特ふ驚嘆こと。歎ぶを復を歓びの声八旦魃ふ

雨ふりく枯る稿ふ八束穂をなつるふもう勝るべ。そゞ中ふ妙真八歎びあまり涙を拭ふく小文吾と共侶ふ又る員ホを慰めつ。耳の辺ヨ声立く房八よやよ沼藺よ。大八を甦生しく。如此この奇特あり。こ且ん夜と稚児を引よ者くヨんせ。玉をヲんせくやよ嘯こと呼活まゞ房八ゆ〻ゑく点頭く。原来コゞ子八宿世あり。渠を坐枡の上より左く左の拳を攫ねゞ任弱者とく賤しめ〻ま大八とふ渾名さ員せらまくもかゝまでふ親ヨ大ま且勝ヨ為ル渠その玉あまと痣あれゞ犬士と誰うい八ざるべ。そまを冥土の餞別ふ受る親さ又果報あま母もさそそハるねるめ適よ子を産ゆ。と誉まとく沼藺八目を瞑ル。ある秋しやとゐるふ末期の一句果敢なも。玉の緒終ふ絶よう。嘯いと惜しやと妙真をむヨ。骸ヨ埋みく。呼久せども逝しよう。ゆ〻ぬ人の数ふ入る。親ヨ〻ぐ大八八母侍嘯乳汁賜てと携ヨを駈く小文吾八。そ〻せぬあそ。と後ヨを抱ル留めてもとめあくぬ涙八敢ど哀別離苦顔を背けく法然ヨを當下戸山の妙真八頭を撞得うちかゝく大笑ふうち對ひ孫大八ぶまれ来ぐふ尤の拳を攫さりふ胎内ヨを分の玉を握ヨとる故ふく彼伏姫ヨ人とゆ〻んの菩提を吊はゆ。道徳のあ〻ヨ鰐ヨ〻くうち裝くべ尤為ヨ尤と暁ヨてもヨ怪しく結も就くハこの孫を。大八と呼ヨ人乃員せ渾名ふく。先輪車とふ迷ん實八真平と名け結ル。房八ゆ親の字を真兵衛と呼ま一ル。その真の字をかヨとゆく。祖父ゆ如此命しん氏八則犬江ゆく。家跡も犬江屋と呼ま結り。今ヨ〻ゆ人ばの且も亦犬とふ字を冠せ。ひとも不思議の因縁あり。願ふ八今ヨゆく孫ゲ名を犬江真平と呼しゆ。物の数ゆ八足ヨもとも大士の後ふ居ヨ〻ゆゞ今目を閉る親へ孝養ふ且ふ結ヨ。と涙ヨぐふ加ル口説べ、大八結く。莞尓とうち笑ふ吾哉ヨく。祖母の情願氏も家跡も主を識る犬江ゆ〻八亦奇ヨ且その親房八身を殺ヨく仁をヨ結りよヨくその子八仁の字の見れヨる

王を沒う。仁は五常の最なるもの。廼天の心ゆゑ。賢者もてゆゑ居ること難し。今嘉平は親ゆゑ代りて。犬士の隊ゆ入るゆゑ。その真の字をもて。と漬む親の字ゆ写更へ。八江親兵衛仁と名告べ。その子ゆく親なべく。房八は再生して。犬士の隊ゆ入るゆ等し。且房八の二字を轉倒せば。是則八房と沼蘭を轉倒せば。是いぬと妙真が俗名なり。戸山と富山と和訓なり。俱ゆ名詮自性ゆく。八房の犬富山ゆ因あり。又妙真は真俗二諦一念三千の妙旨ゆとりて。その夫その子。その婦と俱ゆ清果を得るの義なり。その禍の胎を推せば。房八が祖父なり。朴平が失なく。光弘ぬを犯せしが壁妻玉梓時を沒て。逆臣定包を佐けて。主家を横領せしゆ起れり。又福の基を推せば朴平が獨子なり。犬江屋真兵衛その性直にかくてその子孫の為ゆ。舊怨を釋んと欲して。慈善の誓願を發せども果さず。その子房八送命を守て身を殺して仁をなす。則二世の功德ゆ生れり。因果の脫れがたき王鳥の林ゆ集る如く。虫の草ゆ聚るが如く。只悟まざるのみ。かくまでその死を歎くべきもゆ。その生を楽むべきもゆ。と鮮示せば。僉稍之明の醉さめて。弁一阿と感ずる。當下小文吾膝を進めて。大ゆ道德の教化のもかなり。就て又一條の奇談あり。外姪大八の親兵衛が玉を握て生れる。今さらに合まるゆ某総角なりし時。二親の夜話ゆ往時寛正三年の比のことよ。この八江河の水中ゆ夜なく光明を放つとあり。人怪みて怪みて。怕れて水底を探るゆ。己が父文五兵衛は年来漁猟を嗜ゆ。一夕網を携て八江河原ゆ赴く。件の光明を心あてゆ。あべく網をなげうつ。物ゆ罹らねば。其光ゆ望を失なく。その曉なゆ宿呵よかりし。次の日網を乾さんとて引揚て擔ぎ。網の中ゆ物あり。漏落とあり。鏘と音しゆけり。その年沼蘭は二才。親の網を乾て成れば。その傍ゆ這よりて。彼落とあり。死物を撮て口ゆ入れば。父を吐嗟と驚て。その口中へ指をさし入れば。泣をも厭なく。探りてなほ呑下し

文五兵衛
夜
水中の光を
拂

文五兵衛

たゞすけるにや竟に及ばず止みたり。かゝる物を呑さんと為へば安き心もなくて。それや
日数経る随に沼藺は恙もあらざりしかば。やうやくに安堵しけるぞ。彼水中の光物は名劔にも
やとおもひしが夜を犯して網せしかども。底の藻屑もあらざりしかば。この後は江河に光明を
放ことなく昔語にせられしなるを。顧ふに女弟がいりける時網より落るを拾ひたり。
春なりし彼玉なるべし。かくて彼玉は。その腹中にあること十五年。沼藺が十六歳の春
房八に帰ぐに及びて。いく程もなく有身りて。その年の冬生まてる赤子の左の掌にぞその
玉を握りしども時到らねばいまだ攫ず。今又まつに四年に及びて。件の玉は見まくに亦
是不思議のなるぞや。と告るに人みな耳を澄して。いよゝ感嘆なりける。

第三十八回　戸外を戍りて一犬間者を拉ぐ　徴書を返して四彦来使に辞き

信乃は件の物がたりをきゝて。とりわきて。称賛特に浅からず。さてその日けるに。某総
角ありし時家に畜たる犬のなるは昨夕あたり親子に告まゐらせし。その折に外より来りし道
徳にもおぼえしかなん彼巨犬を與四郎と名つけしより其全身黒白八ケの斑毛ありて。
その足はみな白かり。因て四白といふべきを訛りて與四郎と呼びて後にその犬の斃れ
し時庭に埋たりけるに次の年の春その所より生たる梅に最も異なる子を生じて一蔕に八
子麗りて世にいふ八房の梅是也。凡その梅子に仁義云云の八行の文字見れて鮮なれど
蔵れたる日を経て文字は消失れどもその核は今尚あり。彼與四郎はわが母の感得たる
玉を呑ぬと知らずして年を歴て玉を犬の瘡口より。忽然と顕出て。某が手に入たり。梅
の異名を木母といふ木母は則母の木なり今この児とわが玉はおのく母よりのぞ来れり且
彼梅子の八房に生じたると與四郎犬が八个の斑毛とみなおのがじゝ因縁ありしをかう
なく妾に暁得たり。加旃梅子に八行の文字見えしも亦某と荘助と外にも六個
の豪傑ありて。その相似たる玉と痣と具足たるを告るに伏姫上の神霊たのもしき神

夏ゆゑあやまりなめ現八房の犬を轉倒さるる。房八沼蘭の鮮血をぞ浴びよりて男女の血を流ぐとも。ゆゑ難癩かくまぞふ速ふ愈べ〜ゑいりんや又彼血を盛り貝へ修驗の法器ゆゑ役行者の利生もあべ〜。左ふも右ふもよの夫婦へつゆゑ再生の恩人を惜むべ〜惜むべ〜。その男犬士の隊ふ汎入べぐ。その子ふ讓るの故をもつて世をよ〜せらるとよ今へ彼梅子ゆゑ八千の文字も消失ぬとも八房の梅と房八夫妻と亦是名詮自性乃義あり。接を夫婦が墓ふ伏て末世ふ功德を標まべ〜かれべその子大八の親兵衛へゆゑ骨肉の弟ふ答〜。後年里見殿ふ仕まつりて。俱ふ戰場ふ臨まば某ゆゑぞ犬の子を資て敵を鏖ふて功を讓ん倘その戰ひ難義ふ及で。近づく敵を殺拂ひ或へ箭面ふ立塞ぎて。その死ふ代ぎて今霄ゆゑ受〜再生の恩ふ答ん加き山林今宵中途ふて傾逝の送懾何物ふ譬べ死悲〜ゆゑ。心の誠二韃の隔なき胸をうちあけて懷囊ふ納ゆゑ梅の核を拷ぎ出〜ゆゑ包紙を推披て房八ふ視〜

けるぞ。ぞこの梅の核へ後ふ件の夫婦が墓ふ蒔れて芽を生〜。八株の弱木年を歴てその実へ房ふ生〜ぶ里人ぞ件の梅を房八の梅と稱（又へ房の梅とぞ）。間話休題。房八へ大きなる犬ぬ信乃が城心の欺〜ふ苦惱を忍びて梅の核を呑んゆゑ。滕折起〜。吁賢なる犬塚ぬ。博愛言下ふ顕まる。某を過世あるべく。犬士ゆゑ成ぞ。金碗殿の子息ふ〜〜せ〜〜大道德ふ邂逅〜て。祖父が罪を宥らまいとて〜〜年来の願成就せ〜〜ゆゑ齢甫て四歳なる大八の真平へ親ふ代ゆゑ義を取て親兵衛と字せ〜〜仁と名つけらるる。意外乃大幸。今般の欺び給ゆゑ欺亦ふ是ふ〜〜べき。くもゆゑ子へ犬士ゆゑ。且その小父ふ大田あやまて後見をせ〜〜べく。犬塚ぬ成師と〜頼〜〜く此彼の愛顧ふよ〜〜ぞ二親ゆ〜とも何ぞ憂へ。ゆゑ面影の怪〜〜ぬまぐぬ。犬塚ぬ〜ふ似〜〜ゆ〜〜も是ふの因果あれば。なゆ〜〜ん加以某夫婦も玉ふ象る八房の実生の梅ゆて墳墓の標ゆ〜〜も〜〜ぞ。

さて員外の犬士ゐ[illegible]望足りくゐと答る間ゐ[illegible]惜む別を促し[illegible]
時ゐ鶏の声立て天ハ明ぬとぞ乱れ鳴く房八耳を傾てそや鶏明なると東を
ながめん歎ゐよりて時後れるべ[illegible]死も遂ゐ空事なるべし阿闍[illegible]ゐ錯らむ
さくと焦燥ゆぞ小文吾ハ今更ゐ推辞べるるるねども猛死覚期ゐいでるゐ
足も進まぞ巻も撓ぬく応をなるく[illegible]当下蜜崎照文ハ房八小文吾ゐ
うち数ひく人くよりぐ言を聴け促まとも惜むとも生死ま天理自然ゐしく亦
いかゐとも浅ぐなるぞむしろ父十郎ハ伏姫富山ゐ入りぬひし日ぬん傅を命ぜられ
直ち汗馬ゐ鞭うちく姫うへを追なり彼山河のけ[illegible]死瀬をこそさえとまる程ゐ人馬
倶ゐ推流されく其ゐ命を損ぬるる。ちるゐ某此度君命を稟なり大約関の
八州ゐ賢良武勇の烏傑を募んと欲まる程ゐ大法師ゐ環會ぬその引接ゐ依る
ゐふく伏姫上のゐん子ゐ答ぬ四天士ゐ相見ゐ賢を招くの本意ゐ稱へ[illegible]さるべ

山林房八郎ハその義その勇犬士ゐ劣らぬ非命ゐしく今終るとも宜里見の家臣ゐ
べ[illegible]ぞ君公の徴書ゐ[illegible]ゐ拝受しく夜星ゐ就ぞその子親兵衛幼少くとも
君臣二世の恩義深ゐ身後の栄子孫の為ゐ亦よろしぐやと薦揚のところを
速く小四方ゐ一通を取あげく房八ぞ額ゐ翳させ又小文吾を見ぬ[illegible]犬田生
この意を汲る狩房八郎ハけのうしく里見殿の家臣ゐ[illegible]その身必死乃
深痍を負ぬ[illegible]忠勤ゐ餘日ゐ只その僚友犬塚信乃ぞ厄ゐ代り死を救ぞ
主君の為ゐ[illegible]義ゐ救ひ[illegible]深痍と知ぬ[illegible]
苦痛をさ[illegible]仇錯も亦惻隠ぞと將犬士武士魂ゐ小文吾有理と[illegible]腹
刀引提く身を起せば房八莞尓とうち咲く鄙言よのゐ人ハ武士世ハ唯[illegible]蜜崎
ぬ。孝意謝まるゐ餘あるるとハ賤し[illegible]船長の子ゐ生まれくも幸あるて武門ゐ入く
その死を汲りさるべ阿闍の刀を労せんいざ仇錯と学を合しく項を伸うる。

あらねども。と小文吾が掻側める刀の光に吐嗟とおどろく母妙真は身を辟ぐより
え堪ざりし胸は松久の潮けるよりも砕けてもろくも消ゆく子をとどめかし。涙の
出水海に入るが瀬による亀の浮木にも復あひがたき別のかなしさ声を立ども噎縮る。
袖なる共に腸の断るおもひなるに哭沈む。信乃も有繋に哀戚の胸を痛めつゝうち
まのまへに、大法師は房八がほとり近く對ひ立て經論被く偈を示し。ちからに
授る念佛の数八十声と八声の鶏の音雌は鳴ねども母は哭く。やがてほのくらき
心の暗を照すともなく振揚る刀の晃も東天紅。雛鳩ならぬ羽搏して。
共に閃めく大刀音は無常迅速夢数とおもふ覚るが死天の山林惜や杪の獨
花のちり際清き最期ぞ。妙真はかねてより。かゝるべしとは思へども。おもひ堪で伏
沈む声ふせ絞く啼哭べば。膝を枕に再寝せし稚児は驚覚て。そゞろく鳥乱さて
見る人あり。釜さへさま嘶と立よるまで、小文吾は遽しく血刀鞘に納めて。その亡骸を見

せずとく房八が亡骸に。信乃が血著の麻衣をうち被てそうち被たるとも
あらねども稚児を誘へしげに又見かへりつゝ、奶々さまのまゐで欲さのをも独
臥あふに祖母さまのむかしより物暗まぎれて睡しと遊しるなれや。その替に吾侪
が。乳汁賜てんと死顔をさし覗かへて細小なる手を懐へ入まんとすれば妙真のゝ
え堪かねて慌忙き稚児を引よせ抱縮ら理うるまど大八よ縱百年の寿を
釜さへかゝれど奶々も起ど。慕かく亡きるをなのひそのかす随にまだ四月を。
張や裂んとうち歎く夏愛の浅ぬ袖の露皆ら涙又え頭を低く慰めらを稚き
愀然たり。浩処に外面俄頃に騒しく投らる音叫ぶ声檐下近く聞えしが衆皆
齊一驚立うる中に小文吾のちちゆ土間に飛下りて櫃戸を卒と開て見る間
あらせず外面より。撲と投入む人礫まその人框に頭を撲しと脳黄垂て死にけり。
人々いよいよ驚かるゝ。信乃は身ぢかく紙燭しく小文吾は見きるに見死しくろあのは別人

現八勇力
三間者を
塵ふす
顕文
小文吾
犬塚信乃

犬飼現八
孟六
均太

なりき。是則甲夜に來つる。塩濱の鹹四郎これなりけりと。誶る程もなく。敵を左右に挾ミつゝ。衝と内に入るものあり。これ則犬飼現八也。拉れたる間者ハ是鹹四郎が等類なる。牛根孟六と板扱均太なり。大力に締著られて。目をそらさまに舌を吐き。悶苦しむ息吻も。當下信乃ハ立かゝりて。樞戸を闔しが。現八ハ両敵を一度に撲と投畀ねて。膝に引布き動せず。小文吾信乃に打對ていふやう。某曩に志婆浦へ赴きて。破傷風の藥を求めしに。彼藥店ハいぬる年鎌倉へ移住して。今ハ彼処にありといふ。忽地望を失ひて。惆然として思ふやう。又鎌倉へゆかバいたづらに急ぐとも。けふ翌ハ還りがたし。犬塚生ハ大病也。其往返に日を過さバ。よしや藥を購得るとも。轍鮒の窮を救ふに足らじ。とて立かへりて。犬田親子に。よしを告て相譚ひぬ。當時せんすべのなかりしが。肚裏に尋思しつ。そのまゝに取て返して且くも途に憩らはず。只管急ぎて。程に丑三の比及に門まで歸り著しに。裡面にハいくたりの人々の声聞えたり。誶しけれバ。佇て入らず。さて聞定めて。後に來ると。おのれハ彼処に立在て。あるじの翁が不慮の窮阨。山林夫婦その子のうへ。犬塚生を拿ひに。難瘡早に愈しうへ。大道徳と蟇崎ぬしのうへさへ大かた聞とりて。欲しかりし泉に潰れて。胸ハおちつかで。進みも入らんとすれど又思ふやう。山林ハ深痍を負ぬ。その妻ハ手に縛絶て。犬塚不思議よ平愈したるに。是且今圓坐に著たりとも。死なぬ人の生るにあらざれバ。その何となれども。今ハいかにも。天の明るまで待て。外を防ぐにまさるものあらじと。思ひ決けれバ。狗盤て袖垣に身をよせて。音もせず時を移せバ。果して云個の癖者ハ庇間なる壁を穿て。簀子の下に身を潜し。縛きし縄を解たとおもしくて蚊に刺まくる尻を掻え蟢綱かゝる面を拊て。只齊一庇間より蝦蟇の如くに跂出く。檐下近く立聚合彼罪人信乃がるすを恨も欲られ認ぬなり。

と莊官許諾く甲夜の怨を復さべく賞錢八〇〇を頒つべし。さく走れと密語く歩を竊つく共侶ふ云んとつる後より。某矢庭に跳蒐く一賊が衿上掻つ。個を引戻しく拉胡せば殘る両賊ハ駭怒く。打んと拳を閃き下を拂つく筋斗らせ。起んとする初の一賊を又掻個く裡面へ投入れる。あやまち組んとせし。両賊を左右ふ挾ませく一人も漏さじかくの如し。と辞せしく告ふ。小文吾仰くく歎びこの三個の癖者ハ名を云ふと。過てる妻ふ。るく子も急奴原ハ辻相撲を好めども心よろぬあ共。るべ近属ハよせはべりふ。甲夜ふ此奴ふ推蒐ま。云云のるあるべ。その怨を如さん為狄再び潛近つれけん綽ふる仰ましハ危うく死和殿彼処ふ微りせば遂ふ大事を悞まてん。密議を要る奴原ふれば命ハ既ふ亡ふ虫の火虫のまるら死に就くのみ息緒絶しく禍の根を断ふ。とのふ現ハハ両敵を勝ふ引著壓へし。俄ふ項骨屈し

個折げば苦とする。ふ叫びも果ず。諸声脆く目鼻より。血を流しく死てけり。かく現ハ孟六均太鹹四郎ふ。死骸を片隅ふ推累く。物うち被よく掩ひ。そ信乃ふ病著速ふ本復の歎びを述く。小文吾が苦心を労ひ引まく、大照文ら。ふる對面し。且妙真を慰めく。山林夫婦が義死を嘆賞し。その子大八の親兵衛が大士ふるを祝しける。當下小文吾ハ現ハふりふ。犬飼生ハ外ふ立て綽の顛末を告りとのべ今さらくしく告るも要る。既ふ天ハ明ぬふ。猶豫彼帆大夫ふ駭兵を招く必ずべし。縱贋首を作く欺紀ふるとも。さべふるのふ不便ふ。首級を贋しく莊官許諾て親を救ふく。本てん門を出べらく見ゆる橋のほとりふ繫るハ。家の釣舟なり。水陸ともふ警固の駭兵ふ釋去るを見定めく。房八沼蘭が亡骸ハさそ。人々を舟ふ乗しく潛ふ市川ふ。山林が宿所まぐ退紀。和殿ハ前ふもふの地ふ来つまぐ。

大かた案内なるべし。因てぞさらにうち任せおきつるなる也と密語は現八が耳にうちさゝやき、うち点
頭きぬその事は心得たり。犬塚生と相譚らひつるよしもかくもきゝたれば天は既に明たれども猶
から暗かるは今朝の如く霧立ちのぼりて、咫尺の間も別ちがたし。さればや鳥の声だにせざる
なり。己の仇なる何がしらが此の霧を決して霽べくもあらず、皇天后土吾黨を祐させ給ふ也ぞ
わらんぢをはくやいなや出るに遅くとも縡の妨あらじとのみ當下、大八は照文を見かへりて既に
四犬士ともに聚合り御旋を俟へかるべしやとのみ、に照文にてもあるらく信乃現八小文吾らに
うち對ひ嚮にも演説せしごとく、かのくは大かたならぬ里見殿の由緒あり。なん黒印を
受納めたく主従の義を固せらるゝよ相伴ふて安房へかへらん。なん兼勿論なるべしと受
えたらして徴書を人別に遮与ふれけれど信乃等は謹て拜受して、あまを照文に返しつゝ
いかにも某らは幸ひに尊藩に宿縁あり。譬ば後に将軍まれ管領まれ徴させ給ふ
とも他禄を受べきならねども今俺们五人の外に又三犬士あるべきに、いまだ

その人に遭ずなり。その三士はありやなしや目今定かにしりがたけれども額蔵の荘助は既に
同列の犬士なり。彼人ひとり此の席に欽ぬをいぶかりたまふは彼犬川荘助は故伊豆の北條の荘官
なりし犬川衛二が獨子なり。その母親は蛩崎氏の先考と名のるなる十郎氏の従弟なりとぞ。
寛正六年の秋九月、その父衛二は横死し、妻子は追放せられけり。この年荘助は六七
歳乳名を荘之助といひけり。母親は辛くして稚児を携へてゆく、往方は水長鳥安房に
親族は蛩崎のみ、其知人ともなるを心あてにその冬の比かとよ武蔵まで来りしが大塚
の里にて母親俄頃に病よりぬ是に依り荘之助は土地の荘官蟇六が小厮にせら
れて額蔵と名つけられて今も尚彼家にあり、身は村落に成長れども武藝を嗜て
謀慮あり。孝にして且信義を重みぜ實になかなかの豪傑なり、余人には得がたき某た
彼荘助と倶ならで官途に進まん事是不義なり愚意の趣かくの如し。賢察せられば
寄ひかなんと推辞へ小文吾現八も辞齊一亦いなみつ。某ら願ふ所も犬塚と相

同じ。一圓大塚の里に起れる彼荘助に對面して、その事の趣を告げたれば、犬塚のいはく、某にも本意にこそ。かくて且く武者修行して、武術を煆煉せんや。某にも本意にこそ。かくて且く武者修行して、武術を煆煉せんべく。里見殿のおん為に敵國の案内とその強弱を窺知べく後に資とせんとあれば、さればこの五人の外に二犬士あるべし。値ぞ輕べ死やすに八士全く聚りて安房へ集るとも遅死にあらじ。この微書はその日にぞ和殿預りまゐらせ、ねんごろに志を述べ、照文にあらず嘆賞して、三士の辞讓寔に賢なり。鄕に某荒崎に犬田生の大忠の凡なるぬに感佩して、世に大勇士あるこのふたりもまたかくのごとしとぞ。かくて又おのおの犬塚生の信義博愛犬飼生の遠慮勇力いづれを兄とせん。孰を弟とせん。俱に益世の豪傑なり。又彼犬川荘助は伊豆の北條の荘官なり。衛二が子なるべし。某と再従兄弟なり。その犬川衛二は横死して、その家断絶せりと。某近属北條を過りし日里人に伝聞せしこと、いとうたがはしくぞ。その子は今も

悉なく。犬士の一人なりける欽幸ひ尤甚し。北條は是父の故郷なりしとぞ。遠くもあらぬ類族のうち年来迹を疎闊にして、その家の断絶を今茲にぞ伝聞せり。戦國の習俗是非に及ばざるべしとまれかくもあれ二士の辞讓も誣なるべし。さるにん必某も俱に大塚の里に起れる荘助に對面して、微書を授くべし。欽貴僧の意見ぞまゐらせと問へば、大をいなべ、大は要時沈吟して、武藏なる大塚ゆゑ管領扇谷麾下の軍將大石兵衛尉が城塚あり。倘額減の荘助は云云の勇士なるべし。里見より募らるべしとのたまへば、彼死へ俄なるべし。大石が陣番に荘助を取籠て決して遠ざけべきもさぞなるべし。可惜し。死一犬士を喪ふあるべし。や貪道は行脚のなるべし。彼死へいかでか荘助に對面して、命を伝るとても人の疑ひあるべし。さればとて蛮崎生にまく四犬士を識るべし。その一人だに俱せばしく安房へかへるべし。何を畏何を徴に反命をまうしべきかれば犬江親兵衛と

その祖母妙真を倶し奴親兵衛既に安房に赴く。自餘の犬士を招ぎて竟に参聚べし。貪道も一トたび故郷(還りて君の見参に入らんと願フ)

うぬよあらねども。むゝ失ふ八顆の玉のまぐ全く聚うざるをいでハせんかれば

満願の時至らん日に七犬士を伴ふて見まゐらせ。その徴書ハ

野僧且く預ぶべし。犬塚犬田犬飼に也且市川まぐ退死くを。大塚の里に赴

竊に夏の兆を仕助に告るそよ。めぢ。貪道ハ山林夫婦の為に追薦の讀経

ちく。後に彼処へ邁くべ。この浅に後ひ見うとの人ハ照文大に教び別に四通乃

徴書を。とり生く前の二通と共ゐ、大に遞与けて。當下妙真ハ、大照文に

ほとり近く。親兵衛を果らくさそのひけるゆ。かぐりの稚児を。こゝに安房へ

徴るゆ。ひとり赴死ゆひに仕ぢも二犬士まふ推辞まふとふ物数まふぬ親兵

衛。ひとり先ぶちくまゐるべ死や退くとも進むとも人と共倡ゐと宣ぐもん

情るめ。今孫をのく徴るべ影獲く待うとの理りるべ小文吾も外任乃

為に辞を添く。只共倡ゐと辞に。ふり。さりけれども照文ハつゆく許を亂さず。

説諭さんとく争ふを、大ハ急に推禁め。今又ものれらの間答に時を移さ要る

夏。親兵衛ハ小児とのみも亦是犬士の一人る。則麟趾龍孫ものれを他領へ

措べくもさるべく。今ねて安房へ邁ゐあらねば後に浅ぎる。遅死にあらぬ。文五兵

衛に選りまるべ外祖の意見もあるべ。欽伏姫うのもん数殊ハ役行者の通力ゆて。

授のうゝあゐるん。それぶゐや姫うの幼稚をうゝ。時より卒れ。のゝ。その日ゆて行者

の示現ぶくるり。顧ゐに。十一郎と犬田山林ゞ甲乙を試んとく修験者に

打拶ことの地に。ぶ。四犬士を相識るこの人も亦役行者の利益ゆ。

ゆゝ親兵衛が進退も亦ものゝ。便宜あらん朝霞ゆく立ちあらもゆ。ゆる時

程ぶ。小文吾ハ謀ゝ。仍に。ぶ官許ゆ。と促ぶ阿と。信乃ゞ血著の麻

衣の両袖はゆ羅離と刻衣とうとく房八が首を引よせうるゆえ〜なく包めども兄弟又哭く
妙真八包ゑゆう袖の両齊間八絶とゑ見人ゆ被せゑゆ後の片身衣これやこの世の別
そゞと知らぬも慕ふ稚児八小父さま何処へ邁ゆ吾倩も俱ゆと貪縁ゑを信乃八嫌
しく引然八糸のゆれの苦しゆと歎ゑ八ゆゑ煩悩の犬飼ゑ目をあらゆ齊一悲歎
ゑらけるかく〜小文吾八腋刀含ま〜腰ゆ跨首級を右ゑゆ掻出く、大照文ゆ別を
告信乃現八ゆ後のゑゆ鰄四郎おゞ晃八入江の淵へと密ゑゆ諜しあらく妙真武
慰めゆ又將ゑゆ親兵衛が玉のゑゆさえゆ堪ぬ歎ゑゆ懶惰ゑ失しゆゑと心をつけく
刃を起せゑ霎時目送ゆゑ人を立ゆく迹ゆ横八倒あゆれ夫婦の亡骸の夫八舊の
俱ゑゆく軀と首の死別ゑ歎ゑの霧と憂也霑ゆ物も曇ゑく尚暗ゑ門の戸を卒と
推あけく翅ゑゆれ〜鳥自物朝立遠くゆふけり。

里見八犬傳第四輯巻之四終